

【論文】

見ることについての論争

—ウェス・シャロックとジェフ・クルターのJ. J. ギブソン批判について—

須永将史

1 はじめに

視覚、あるいは見る see ことについて、エスノメソドロジストはこれまで多くの研究を行ってきた。一方視覚、あるいは見る see ことについては、心理学的な立場からも多くのことが言及されてきた。とりわけ心理学的立場のなかでももっとも革新的な研究を行ったのはJ. J. ギブソンといわれている。

本稿は、1998年に、Theory & psychology誌において行われた、「視覚」、より正確には「見る see」ことについての論争を扱う。本論争はウェス・シャロックおよびジェフ・クルターと、生態心理学者あるいは認知心理学者との間で交わされた論争であり、'On What We Can See'と題された論文で行われたシャロックらのギブソン批判を皮切りに開始した。本稿では、これらの論争の整理を試みることで、(1) 生態心理学とエスノメソドロジーではどのように「見ること seeing」の扱い方が異なるのかを整理する。また、(2) エスノメソドロジストがギブソンの議論をどのように理解し、どのように自分たちの議論において「視覚」を扱っていくべきと考えているのか、明確化する。

2 ウェス・シャロック、ジェフ・クルターのギブソン批判

この節では、ウェス・シャロックとジェフ・クルターがギブソンをどのように肯定的に評価し、

またどの点において批判しているのかを明らかにしておく。

2.1 シャロックらの方針

まず、シャロックらはギブソンがデカルト的な視覚システムおよび認知システムを拒絶した点を取り上げている。伝統的な知覚理論は視覚について、網膜像に投影され表象された像を認知システムが把握する、と考えてきた。ここでギブソンによって拒絶されている認知システムとは「感覚刺激を統合し、判断し、推論し、意味に仕立てるメカニズム」のことであり、かんたんにいえば「こころ」の働きのことである(佐々木 2015: 8)。ギブソンによれば、間接的な知覚に依拠するこの伝統的知覚理論は間違っている。知覚は直接なされる。環境によって与えられる(affordされる)情報は直接知覚されているというのがギブソンの主張である。

環境の知覚が直接的だと主張するときには、それが網膜の画像、神経の画像あるいは心的画像によって仲介されていないという意味である。直接知覚とは、包囲光配列から情報を得る活動である。これを私は、見回す、歩き回る、見つめるなどの探索活動を含む情報抽出の過程とよぶ。これは、どのようなものであれ、視神経入力から情報を得るといふ仮定された活動とは全く別ものである。(Gibson 1979=1985: 161)

つまり、伝統的知覚理論が検証しようとしてきた、固定した視点における網膜に対象が投影されるという視覚システムは、実験室においてつくられたシステムであり、「生活の中で必要とする視覚」すなわち「自然視」とは異なるというのである（Gibson 1979=1985: 2）。むしろわれわれは、動き回ったり見まわしたりしながら、面の配置とその奥行きを直接知覚する。

シャロックらは、以上のギブソンの直接知覚の主張を指し、伝統的知覚理論との違いは、情報についてのシステムがただ変化しただけなのではないかという。そして、ギブソンが立てた「アフォードされる『情報』の『抽出』はいかに可能か」という問いは、そもそも問う必要のない擬似問題だと主張する。シャロックらによれば、このように問うことでギブソンは、デカルト主義の伝統に逆行してしまったというのだ。ギブソンは、伝統的な知覚理論の教義、すなわち「表象主義者 representationalist」の方針から距離を取ろうとした。環境に対し観察者が抱く内的表象という考え方を棄却しようとした。にもかかわらずギブソンは、それに代替する「メカニズム」が必然的に必要になってくるという考え方に抗することはできなかったという。これを指してシャロックらは、情報-過程 information-processingメカニズム（伝統的知覚論）が情報-抽出 information-extractingメカニズム（ギブソン）に取って代わられたにすぎず、メカニズムを必要とする点そのものの根本的批判にギブソンは至っていないのではないかと述べる（Sharrock & Coulter 1998a: 149）。

2.2 本質的問題としてのタームの用法

のちに詳述するが、シャロックらは、「知覚すること perceiving」という語を使用することがミスリーディングだと指摘し、批判をはじめている。ただし、彼らは、あくまでもテクニカルタームを使うこと自体に異論はない。たとえば、物理学者が「ストレンジ strange」や「チャーム charm」

を、原子を構成する粒子の特徴を示すために、日常的な言葉遣いから概念構成することには何の異論もないようである（Sharrock & Coulter 1998a: 149）。

しかしながら、ギブソンが著作の中で「見る see」や「知覚する perceive」という語を使用する場合、語の意味が持つ日常性が「悪用」され、混乱を導いているという。というのも、ギブソンが著作の中で提示する例においては、「誰かが何かを見て、それに意識を集める」ということが書かれるわけだが、その際ギブソンはその語の意味の日常的な適用可能性に強く依存しながらも、科学的な概念として定義し使用している。端的に言えばギブソンが科学的な概念として使っている語は、日常的な意味のまま使われているのである。日常的な概念を日常的な意味のまま使っているにもかかわらず、環境や情報などと組み合わせられ科学的な概念として確立されている。つまり、ギブソンには物理学が試みたような、日常的な概念を科学的な概念として概念形成する試みがなかったというのである（Sharrock & Coulter 1998a: 150）。

言い換えれば、ギブソンが使用する概念は、一見「テクニカルな」使用を試みているようにみえるものの、その使用は物理学にみられるようなテクニカルな使用とは根本的に異なっていた。つまりシャロックらは、ライルがいうように「見ること seeing」や「知覚すること perceiving」は「達成 achievement」や「成功 success」として使用されるべきであり、なんらかの「心理的プロセス」を意味するものとして使うべきではないと考えている（プロセスなどについては、むしろ「挿話の名前」が適用されるべきなのだ）。したがってシャロックらは、ギブソンの用法は、ライルの語彙でいえば、挿話の名前（プロセス）を使うべきところに、「達成 achievement」や「成功 success」をあらわす語（「見る」など）を使うという過誤を犯している。

そして、もしライルが正しいとするならば、「見る see」ことをギブソンが扱う場合は、「ア

フォーダンス」や「情報抽出」のようなプロセスを扱う必要がないため、直接知覚論をことさらに主張する必要はないのではないかとシャロックらは主張する (Sharrock & Coulter 1998a: 150)。以上をふまえ、シャロックらは論じるべき本質的な問題領域を次のように定式化する (Sharrock & Coulter 1998a: 150)。

1. まずは理論家による「テクニカル」な科学的特徴づけと、日常的な言葉づかいにおける「見る」「知覚する」という表現のあいだを精緻化すること。
2. 物理学や光学など、理論家によって描かれる「客観的」環境と、有機体によって「主観的に」経験される環境のあいだを分節化すること。ギブソンにとってアフォーダンスは、主観と客観の二項対立に対し、知覚された対象が観察者にとって「関係的」であると考えることで克服しようとした概念である (Gibson 1979=1985: 139)。しかしながら日常的な意味で「見る」者にとって、そもそも主観と客観は完全に解消されている。

シャロックたちの主張は、伝統的知覚論が使うメカニズムにせよギブソンのアフォーダンスにせよ、日常的な意味においては我々は知覚しているものは全く変わらない、ということにある。したがって、彼らの論点はギブソンの経験的なモデルの検証や、心理学的な研究における「アフォーダンス」のような考え方の効用を論じるものでもない。シャロックらが行うべきと考えているのは、端的には「諸タームの用法」「諸概念」を精緻化することである。すなわち、「見るsee」や「知覚するperceive」あるいは「情報information」そして「アフォーダンスaffordance」を考察することで、ギブソンが、知覚についての概念を整備するための哲学的議論を回避し、方法論的な折り合いをつけたそのやり方が、成功したのかどうかを検討する。つまり、ギブソンの概念の使用法が何を

達成しえたのかを考察したいというわけである。

この線に沿ってシャロックらは、具体的にはギブソンの語の使用に沿って3つの点を指摘することでギブソンを批判する。

- i. アフォーダンスの知覚が機会依存的 (occasional) であることについて
- ii. 情報「抽出」というタームについて
- iii. 視覚の概念依存性について

ii についてのみ簡単に述べておこう。ギブソンはアフォーダンスが「刺激情報stimulus information」によって「特定specified」されると述べた。

ギブソンが主張したように、生態学的情報による事物のアフォーダンスの特定は、抽象的な古典的物理特性 (例えば、デカルトの空間の三次元のような) によるのではなく、肌理、変形への抵抗、操作可能性といった生態学に関連する特性によるはずである。両タイプの特性は実在するが、動物が直接意識するのは機能的な特性、即ち、アフォーダンスの方である。ギブソンの心理学の一番の目標は、アフォーダンスを特定できる情報を発見することにある。(Reed 1988=2006: 310)

ギブソンは、「情報プロセスinformation-processing」という伝統的知覚理論の考え方から距離を取ろうとしていたのにもかかわらず、彼にとって「情報」は中心的概念になってしまった。ギブソンは『生態学的視覚論』で「情報」を観察者による環境の特定specificationと呼び、「対象の性質は情報によって特定される」(Gibson 1979=1985: 257) と述べた。

この点についてシャロックらは、ギブソンの理論的なシステムが伝統的知覚理論、あるいは認知主義的観点を維持していると述べる。すなわちギブソンは、我々が世界を「直接知覚している」と主張したわけだが、当の環境の特定の仕方を経験

的かつ科学的にあつかうことが可能な問題として扱った。つまりギブソンは、知覚対象そのものと、そのなかにあり「科学的」に記述される知覚対象（ギブソンの場合、これを情報放射体 information emitter と呼ぶ）との間の「ギャップ」を橋渡しするような理論あるいは中間領域 middle ground を必要としたのである。そしてそれを経験的に明らかにできると仮説したというわけである。このギブソンの問い、いかにして情報は特定され抽出されるのか、という問いは、シャロックらによれば、間違った問いの立て方なのだ (Sharrock & Coulter 1998a: 154)。

シャロックとクルターは、ギブソンはアフォーダンスについて説明するうちに、デカルト的伝統を持ち出さなければならなくなったと分析する。シャロックらは「対象そのもの」と「対象を知覚すること」の間に中間領域 middle ground を構成する必要はないと考えるわけだが、アフォーダンスというターム、あるいは「抽出 extract」「情報 information」といったタームがミドルグラウンドの創設にかかわっているというわけである (Sharrock & Coulter 1998a: 154)。以下 i, ii, iii を順に解説する。

3 3つの批判

3.1 アフォーダンスの知覚の機会依存性について

シャロックらの批判の i は次である。すなわちギブソンが、見えるものは、それがなんであれ、オムニレリヴァントに（常に観察者に関連性をもつものとして）、不変に構成されると考えている点にある。つまりアフォーダンスを、環境内で見えるものすべてに対して特徴づけが可能な概念として使用しているというのだ。

シャロックらは見えたものの特徴を適切に記述すること自体は可能であると考えている。またその特徴を、ギブソンの言葉遣いでいえば「アフォーダンス」として合理的に reasonably 解釈される機会 occasion が生じることを否定しているわ

けでもない (Sharrock & Coulter 1998a: 155)。

しかしながら、シャロックらは次のような例を挙げる。幼児はある対象 object に対し、「しゃぶるもの」「後ろに隠れるためのもの」、観察可能な形で志向する。それに対し大人の教師は、チョークの切れ端のような対象 object に「うるさい子供たちが教室の向こうにいる時に投げつけても当たり障りのないもの」として志向することもあるだろう。だが、もし「それが唯一『アフォードするもの what it affords』はなにか」をたしかめた場合、そのチョークを「チョーク（投げるものではなく）」として特徴づけられることにその教師は気付かないだろうか。シャロックらはもちろん気付くだろう、と述べる (Sharrock & Coulter 1998a: 155)。対象やそのアフォーダンスを常に抽出することができる知覚的状况にあるわけではない。また我々は、知覚からのみ「世界を理解する get the world」のではなく、社会化や教育、訓練などから理解するのである。我々は、りんごが食べることを eating をアフォードしていることを見る see ことができる。というのも我々がかつてりんごを食べたからであり、りんごを食べられるものとして同定するように教えられてきたからである。我々はいかにしてりんごを食べることをアフォードしていることを知るのか——つまり、それを見る（わかる）see ことが可能か——という問いは、我々はその対象による放射光から「アフォーダンス」をどのようにして抽出することが可能になるのかを分節化しても解決されない。むしろ、それを食べられることを知る機会に依存しているというのが、シャロックらの i の批判である。

3.2 情報「抽出」というタームについて

ii の点に移る。ここでの重要なポイントは、情報を集める gather/得る obtain ことは、見ること seeing を「前提」しているということにある。シャロックらにとって、それはけっして見ること seeing を「説明」しているわけではない。

シャロックらは次のように疑問を投げかける。光から「抽出」することができる「情報」とは何なのか。観察者にとって環境を「特定specification」するとは何を意味しているのか。観察者が見るためには環境の特徴が「特定され」なければならないという考え方は、そうした特徴が彼に「表象される」という旧来の考え方と基本的には一致してしまう。そして、見られるものは情報を通じて見られるというこの考えは、間接的知覚の基礎的な理論のロジックに酷似しており、それはギブソンが最終的には受け入れがたいものとしてみなさなければならないものではないか。

ギブソンの理論において「情報」概念は、導入されて以降、「抽出」や「特定」と結び付けられて語られるようになり、問題はさらに急増したとシャロックらはみる。ギブソンは、視覚に関わる活動までも、視知覚の概念に含めてしまった。その活動として代表的なのが「収集pick up」あるいは「抽出extract」であり、これらはライルが言うように挿話episodeに関わる動詞なのである。我々は、何かを「収集pick up」することに従事するということができる。しかし、ライルによれば、見るseeingのに忙しいとか気づくspottingに忙しいと言うことはできない。つまり、視覚を表す語彙には様々な違いがあり、見ることseeingは、たとえば「検査する」というような視覚にかかわる活動の前提にあるのである。

3.3 知覚の達成が「概念依存的であること」について

iiiの点に移る。シャロックらにとって、人間の視覚能力やその稼働の適切な説明は、概念の所有が決定的に重要である。「概念」は反認知主義あるいは旧来の知覚理論に反対する立場から見て、疑わしいものと考えられがちのようである。つまり、「概念を所有する」というとき、内的な構築的な「心的プロセス」が「完全な人間の感覚によってものを見る」ことの説明に再導入されてしまっているのではないかと考えられる傾向にある

というのである (Sharrock & Coulter 1998a: 157)。したがって「概念」は、放射光から抽出される「情報」をさらに覆う認知的な「上貼り」と考えられているのではないかとシャロックらは考えている。しかしながら、シャロックらにとって「概念を所有する」ことは、端的に正確な使用のルールに従って、象徴的表現（語、フレーズなどである）を分節化する能力を所有することである、という (Sharrock & Coulter 1998a: 157)。

シャロックらは、我々が自身の視覚野から「雄しべ」を見るseeことができる能力を例に挙げている。雄しべを弁別する能力は、それがどんな意味なのかについての私の知識に依存している。そして「雄しべ」を適用するためのルール、あるいはどのようにすればそれを適切に指示することができるのかを、知っているかどうか依存する。そうした能力が欠如していた場合、「雄しべ」を見ることができるとはみなされない。すなわち、雄しべを見ることができるとは、それに目を向けるlook atことができること、それが何なのかを言うことができること、植物の花びらの花粉がついている場所だということを知っていること、これらすべてを含むのである (Sharrock & Coulter 1998a: 157)。

またシャロックらは、我々の知識には等級がつけられるgradableことにも触れている。我々は雄しべが何なのか知っているし、花びらの一部で花粉がついている場所だということも知っているが、雄しべが植物において「男性」的な受胎組織であることは知らないこともありうる。この種類の情報は、雄しべが何なのか知っていることとは根本的に異なる (Sharrock & Coulter 1998a: 158)。つまり、雄しべそのものの概念の所有とは雄しべについての完全な知識を持つことは異なるのだ。

さて、この点について、シャロックらは次のような反論を想定している。つまり、我々が雄しべを知る前に、私はそれを「見ているsee」とはいえないのか、という反論だ。つまり、結果と

して我々がそれを雄しべ「として」見るようになる前に、その対象objectを見ているだろう、と。これは間違っている、とシャロックらは言う。ヴィトゲンシュタインが言うように、知覚されたものすべてがXをY「として」見るseeことの例になるわけではないだろう、と。

「私は今それを……として見ている」と言うことは、私にとっては、ナイフとフォークを眼の前にして「私は今それをナイフとフォークとして見ている」と言う事が無意味であるのと同様に、無意味である。人は、「私は今それを……として見ている」という表現を、理解しないだろう。——それは丁度、人は「今それは私にとってはフォークである」とか「それはまたフォークでもあり得る」とか言う表現を理解しないであろうのと、同様である。(Wittgenstein 1953=1976: 45 [195b])

人はまた、食卓で食器として認められているものを、[改めて] 食器と「見なす」ことはない；それは丁度、人は食事の際、通常は、口を動かそうと試みたりしないのと、同様である。(Wittgenstein 1953=1976: 45 [195c])

もちろん、XをY「として」見るという表現を我々は日常的に使用している。しかしながらそれが使用されるのは、「ロープを蛇として見る」というように「誤解」している場合など、その場面が限定的な場合である（前田：2002）。

どんなに強い意味で「情報」を用いたとしても、情報は光から抽出できる何物かではありえない。我々は、日常的な意味で「雄しべを見る」という言葉を実際に使用しているわけだが、それが雄しべであることは包囲光配列によって教えられたのではない。「雄しべを見る」ことは、「訓練し学習し教育され社会化されるといった様々な様式によって習得するものなのだ」(Sharrock &

Coulter 1998a 158)。ギブソンは、幼児が成熟する際の社会化する際の役割を認識していたが、言語について彼が言っていることと知覚的環境について彼が扱ったことの間に適切な概念的結びつきを形成することはできなかった。我々にとって、理解可能な環境な出現と自然言語の獲得は同時進行し、後者は前者にとっての必須条件だ。以上がシャロックらの批判のiiiである。

ギブソンは、伝統的知覚論が構成する内的メカニズムを排除することに苦心し、「直接」知覚を主張した。にもかかわらずシャロックらにとって「情報抽出information extraction」概念は、どこに「情報」があるのか、抽出されたいつどのようになっているのかなどの問題を引き起こす概念だ。ギブソンや彼の後進は、情報は環境の「中に」あるとした。そして、包囲光配列によって「特定されるspecified」と主張した。しかし、日常的世界で「我々に見えるものwhat we can ordinary see」を記述することを目指す限り、こうした概念を仮説する必要はない。見えるものwhat is seenは、observer、perceiver、scanner、scrutinizer、witnessらによって所有された概念において特定されうるspecifiableのである。

日常的世界における見えるものへのアプローチには、一方で、神経生理学によってその因果関係的条件を追求するものがありうる。そして他方で、エスノメソドロジーあるいは関連する研究のように、「活動の中で視覚的に利用可能なもの（=見えるもの）を説明する際に概念が使用されるやり方」を探求するものが挙げられよう。

シャロックらは、以上の議論をまとめ、最後に、こうしたふたつの記述の「中間」を仮説する必要もなければ、あったとしても諸概念によってそれを架橋する必要はなかったのではないかと述べている (Sharrock & Coulter 1998a: 162)。

4 アラン・コスタル & イヴァン・ルーダー、およびウィリアム・ノーブルの批判とシャロックらの反批判

4.1 アラン・コスタル& イヴァン・ルーダー、およびウィリアム・ノーブルの批判

以下では、アラン・コスタルとイヴァン・ルーダーの批判を扱う (Costall & Leudar 1998)。冒頭でコスタルらは、心理学の立場を擁護しながらも、そのプロジェクトの困難さを述べている。

心理学は、「非科学的なもの」の科学を確立しようとする試みである。すなわち心理学は、一方で「心理学的なもの」の領域を徹頭徹尾科学的に同定しようとするプロジェクトであるのだが、他方で信頼性の高い「科学」として方法論に対してコミットしようとし続けることで手に負えない残余物をその対象として定義してきたという、逆説的なプロジェクトなのである。(Costall & Leudar 1998 166)

心理学の対象すなわち「心」の領域は、科学的に探求される対象である。そのために心理学は方法論の精緻化に苦心してきたが、方法論を精緻化すればするほど、残余カテゴリーを生み出してしまふ。この意味で、コスタルにとって心理学は逆説的な試みである。こうしたなかで、その試みを達成した人物として、コスタルはまずギブソンを擁護している。

「知覚者 perceivers」は、ギブソンがいうには「物理学のいう次元 dimension に気づいてなどないのである」(Gibson 1979=1985: 308)。彼は、「空間」という幾何学的観念を表面のレイアウト surface layout に置き換えた。さらに特筆すべきは、「無機質」な物理理論の世界を「アフォードンス」に置き換えた。この点、コスタルらは非常に高く評価している。

環境のアフォードンスとは、環境が動物に提供する (offers) もの、良いものであれ悪いものであれ、用意したり備えたりする (provide or furnishe) ものである。アフォードする (afford) という動詞は、辞書に在るがアフォードンスという名詞はない。この言葉は私の造語である。アフォードンスという言葉で私は、既存の用語では表現し得ない仕方で、環境と動物の両者に関連するものをいい表わしたいのである。この言葉は動物と環境の相補性を包含している。(Gibson 1979=1985: 137)

ギブソンは、アフォードンスと抽象的な物理学的な特徴とは異なると指摘しつつつけた。アフォードンスは、「それぞれの動物に固有であり、決して抽象的物物理的特性ではない。それらはその動物の姿勢や行動と関連した統一性をもっている。したがって、アフォードンスは、物理学でものを測るようには測定することはできない。」(Gibson 1979=1985: 138)

コスタルらは、こうしたギブソンの理論を評価したのだが、続けて、シャロックとクルターの批判ももっともである、と述べている。筆者が直前に引用した箇所の2ページ後でギブソンは、それまでアフォードンスの関係的な relational 身分について述べてきたにもかかわらず、次のように分類しなおしている。「有機体は生活のために環境に依存しているが、環境はその存在のために有機体に依存してはいない」(Gibson 1979=1985: 140)。つまり、一方で、アフォードンスは環境と動物の両者に関連するといひ、動物と環境の相補性が述べられている。また、動物の姿勢や行動とも関わっているともしられる。しかしながら他方で、環境は有機体に依存してはいないとも述べる。この奇妙な矛盾をコスタルは指摘し、シャロックらのいうように概念の用法に問題があるという点を支持するのである。

ただ、やはりコスタルらは、シャロックらには

同意しない。論点は二つである。すなわち、(1) アフォーダンスは、知覚にとってではなく行為者 agency にとっての概念であるという点、そして (2) シャロックらによる「経験的なもの」と「概念的なもの」の二分法がそもそも適切でないのではないかという点である。

(1) から述べよう。コスタルらの観点では、アフォーダンスの概念は「知覚」についてではなく、行為者 agency の可能性についての概念なのである。さらにアフォーダンスは、関係的なものであり、活動とその「アフォーダンス」は論理的に不可分なのである。言い方を換えれば、行為は状況に位置付けられている。この点をコスタルらは、ルーシー・サッチマンに引き付けて示している。

状況的行為の組織化を、行為者間の、また行為者と行為が行われる環境の間の時々刻々のインタラクションを通して立ち現れる特性と考える…このアプローチが求めるのは次である。…時空間に位置づけられた対象、人工物、他の行為者からなる複雑な世界における行為の随伴性 (contingency) を、個々の行為者が対処しなくてはならないすじちがいのやっかいものとしてではなく、むしろそれを、知識を可能とし、行為に意味を与える重要なリソースとして捉えるような視野 (perspective) の変化である。(Suchman 1987=1999 171)

述べたように、アフォーダンスはたしかにあいまいな概念と言えるかもしれない。したがって、シャロックらのようにアフォーダンスを捉える仕方と、コスタルらのようにとらえる仕方と、二つの方向があるのではないかとコスタルらはいう。

シャロックらの批判に一致する仕方は、「我々は何を見ることができるのか what we can see」についての「知覚」のための概念である。この解釈には、ギブソンが、「アフォーダンスの理論にとって中心の問題は、アフォーダンスが現実に存

在するか否かではなく、アフォーダンスを知覚するための情報が包囲光の中に利用できるように存在するか否かという問題である。」(Gibson 1979 =1985: 153) と述べることに整合する。

しかしながら、アフォーダンスにはもう一つの理解の仕方があり、それは、「知覚」についての伝統的理論的スキームを破壊する試みでもあったのではないか。ギブソンは、理論的言説から生まれた抽象的概念である「知覚」は、知覚表象理論の発達 development に緊密に結び付けられた概念であることに気づいていた。「知覚」は伝統的知覚論の観察者による認識論が発達するとともに同定されるようになってきたのだというわけである。そのような視座にたつたとき、ギブソンが『生態学的視覚論』でおこなった「刺激-反応」システムの放棄の試みに意義をみいだせるのではないか。知覚について主要な概念ではなく、あくまでも「行為者 agency」のための概念であり、伝統的知覚理論そのものの転覆としての機能を理解してこそ、生産的なのではないだろうか。以上のようにコスタルらは、シャロックらと自分たちの立場の違いを整理する。

(2) の、「経験的なもの empirical」と「概念的なもの conceptual」について述べる。(Sharrock & Coulter 1998a) で、シャロックとクルターは「経験的なもの empirical」と「概念的なもの conceptual」の二分法を何度か想起しているとコスタルらは理解している。コスタルらの理解では、シャロックらはその厳格な二分法に依拠し、ギブソン理論に「経験的なもの empirical」と「概念的なもの conceptual」の混同を見出し、批判しているというのだ。そしてコスタルらは、シャロックらの依拠するこの二分法がそもそも説得力がないのではないかと考えているようだ。コスタルらの説明ではこうである。第一に、「経験的なもの」というタームは非常に限定的な歴史を持っていて、その歴史は「知覚」理論の伝統的なスキームに緊密に結び付けられている。つまり、経験的という概念は、歴史的には知覚についての「理論」と緊

密に結び付けられてきたのである。第二に、「概念的なもの」は恒久的形態として不変であるわけではない。歴史的に変遷もするのではないか。このように、「経験的なもの」と「概念的なもの」がきっちり二分できるわけではない以上、シャロックとクルターがギブソンの立場に混同を見出そうとしても、むしろ現実味がないのではないかと (Costall & Leudar 1988: 169)。

そしてコスタルらは、ギブソンを擁護し、次のような例を考えることで、経験的なものと概念的なものの混合 (とシャロックらにはみえるもの) は理解しうるのではないかという。つまり、「複雑な道路での道案内」や「難しい滑走路への飛行機のうまい着陸」などの、経験的で実際的な関心によって、概念の改訂・変化が少なからずおこるような場合である。コスタルらはいう。

我々は、言語哲学による「理論」と「日常会話」のあいだの厳密な区別を信頼しているわけではない。「日常会話Everyday talk」は、均質で静的というわけではまったくないし、また、科学的あるいは哲学的でテクニカルな談話から完全に隔離されているわけでもない。「日常会話Everyday talk」は、たとえば「知覚」や「記憶」についての現在の理論によって簡単に理論形成できるものではなく、そうしたタームそのものがまさに理論的な談話から持ち込まれているような次第である。そしてその日常会話のなかで、「知覚」というタームが [テクニカルな語として] 想起されることで、そのタームはテクニカルな意味や名声を保つことができる。(Costall & Leudar 1998: 169)

次に、ウィリアム・ノーブルがおこなったシャロックらへの批判を扱っておこう。ノーブルの指摘はシンプルなものである。まず、ノーブルはシャロックらの批判を次のように理解している。すなわち、ギブソンは心理学の旧来の理論家と同

じように、プロセスとして知覚を捉えようとし、「情報抽出information-extraction」や「収集pick up」などの「活動activity」として見ることをseeingを理解していた (Noble 1998: 173)。この点がシャロックらにとって問題だった。ならばその代わりにギブソンは、ライルのように、「見ることをseeing」は達成であり、プロセスではなかったというべきだったのだ、と。ノーブルは、「そしておそらくギブソンはそう考えてはいた」と読む。その証拠としてノーブルは174頁で、ギブソンの次の個所を引く。

知覚表象が刺激に対する自動的反応だという意味をもたせるべきではなかった。なぜならば、当時ですら私は、知覚が、活動であって反応ではない、注意という活動であって触発された印象ではない、1つの達成行為であって反射ではない、ということに気づいていたからである。(Gibson 1979=1985: 163-164)

しかしながらギブソンは、「知覚」などの歴史的な語彙を持ち込みながら、見ることをseeingの日常的なありようの解明に取り組んでしまった。このような歴史的な語彙を使うことは、ギブソンの立場を混乱したものに見せてしまうかもしれないが、シャロックとクルターが帰属させているような意味で心理学的プロセスを定式化しているようにはみえない (Noble 1998: 173)。

そこで、ギブソンに好意的に、次のように理解してはどうかとノーブルは提案する。つまり情報収集information pickupを、ラジオの受信機がセルフチューニングモードのとき、その環境内の構造化された電気信号を抽出し、共鳴する場合に示しているようなたぐいの「収集picking up」として理解するべきなのである。ギブソンの理論は、動物が自分たちの周囲に関わり続けることを継続するのはいかにしてかと考える時、最もうまく理解できるのではないかと (Noble 1998: 173)。

4.2. シャロックらの反批判

以上の (Costall & Leudar 1998) および (Noble 1998) の議論に、シャロックらは (Sharrock & Coulter 1998b) で応答している。まず、基本的にコストルとルーダーのギブソン理解については概ね同意する。特にギブソンが、「科学的心理学」を構築しようとしたという理解はその通りだと考えているようだ。先に引用した、コストルらの描く心理学の困難に対し、ギブソンは伝統的知覚理論からの脱却を試みたのであろう、と (Sharrock & Coulter 1998b: 177)。シャロックらはしかしながら、ギブソンが人間の状況的な振る舞いについての概念に接近しているかもしれないが、それでも、対象とその認知のあいだ懸隔 gap を仮説する必要性についてはないだろうと批判する。つまり、ギブソンはなぜ日常的な意味で「見えるもの」を扱うにあたってアフォーダンスや情報抽出という概念が必要だったのか、それは本当に適切だったのか、コストルらはこの点に答えてくれないというのがシャロックらの反論である (Sharrock & Coulter 1998b: 178)。

加えて、「経験的なもの」と「概念的なもの」の二分法についてのコスタルらの見解には、手厳しく反論している。

「経験的」という語は、心理学の領域のなかでとりわけ論争的な歴史を持っているのかもしれないが、シャロックらが (Sharrock & Coulter 1998a) でこの語によって論じたかったのは、語の歴史的形成ではなかった。経験的という語でシャロックらがいいたいのは端的には次のようなことである。「経験的な empirical」ものは、偶発的 contingent で事実的な問題である。偶発的な問題であったとしても、事実として実際に確立されてしまうもの、これが「経験的 empirical」という概念である。ここには何ら不可思議なことはなく、理論的あるいは存在論的な知見に頼る必要はない。「経験的な現象」として適切に記述されるものは、人間経験によって明らかにされるものであり、すなわち観察 (active であれば passive であ

れ)、観測 looking at、気づき noticing、などによって明らかにされる。つまり、「経験的な事実」は一見自明のことであるが、他方、それを「経験的なもの」として確立するためには重要な科学的な作業が必要となってくる。そのどちらもが、彼らが「経験的」という概念を適用したい対象となる (Sharrock & Coulter 1998b: 179)。

しかしながら、とシャロックらは書いている。彼らが強く反論しているのは「概念的な conceptual」をどう理解するかにおいてである。コストルらにとって、「概念的なもの」は「日常的会話」にでたらめに存在するものとして不当に解釈されている。シャロックらは、語の使用と誤用の間に原理的な区別が可能であることを指摘し、これに反対している。というのも、「文法」は、規範的なものであり、我々はその誤りを指摘することができる。我々は、「日常的会話」の中で人々が言うであろうことならなんでもそれを範として扱うわけではないのだ。人々は誤用することがあるし、ナンセンスに語ることもあるのである。

つまり、人々が語る言語は規則 (そしてそれは違反されうる) を持っており、その規則そのものにも我々は考察をくわえることもある。つまりコストルとルーダーが見落としているのは、「人々が事実として言うこと」と、「人々がそれによって (論理的に) 意味しうること」との差異を我々が理解できることである。またさらに見落としているのは、シャロックらが「使用」というとき、その領域が「実際の (ただの経験的な) 談話/使用」に値するのではなく、「(規範的に) 『適切な使用』」の領域に値するということである。つまり要約していうと、「日常的な使用への訴え」は「日常会話への訴え」の類とは全く異なるとシャロックらは言いたいのだ (Sharrock & Coulter 1998b: 179)。

すなわち、概念は、偶発的な基準によって競合することができるものではない。以上がシャロックらのコストルに対する反論の主眼である。

一方ノーブルに対しては、非常に簡単に以下の

ように述べている。ノーブルが引用した箇所がギブソンを擁護できるとはおもえない。ギブソンは当の段落で知覚は達成であると確かに書いているが、そのあとすぐその段落のなかで、続けて行為actだとも書いている。この点、概念を混合させることで事態を複雑にしているとしか言えないのではないか、とシャロックらは述べている。

5. N.E. ウェテリックの批判とシャロックらの反批判

本節では、N.E. ウェテリックの (Wetherick 1999) によるシャロックらへの批判と、それに対するシャロックらの応答を扱う (Sharrock & Coulter 1999)。コスタルらやノーブルがシャロックらの主張を部分的に認め、ギブソンを擁護していたのに対し、ウェテリックの批判はよりギブソンとシャロック双方に向けられたものとなっている。そしてとくにシャロックらの試みは「心理学の排除」であり、学問分野として社会学や哲学が上位に立とうとした試みである理解しているようである (Wetherick 1999: 552)。

ウェテリックの中心的な主張は次だ。すなわち、ギブソンもシャロックらも、どちらも重要なステップを無視しており、その点において誤りだろうということである。その重要なステップとは、「物理的/生理学的プロセス」と「なにがどこにあるのかと対象を知覚すること」とを橋渡しするステップである。そのステップは言い換えれば、その対象を「対象として」同定するというステップである。そのステップにおいて、その対象が持つ知覚的特徴や、知覚者とその「対象」との間の物理的距離を同定する。このステップこそが、心理学の主題問題を形成してきたにもかかわらず、ギブソンらはそれを人間の本質的な能力として片付け、シャロックとクルターに至ってはその問題を無視しているという (Wetherick 1999: 552)。

ウェテリックは、対象が知覚者と独立に存在しているという前提をシャロックらが無視している

という。知覚者は、自身とは独立に存在する対象との距離、その動きを知覚しなければならないのである。そして、その対象をどういう角度で見るとかは知覚者の身体に備わる「眼球」の位置によって決定されるともいう。すなわち、知覚者が、外的世界にあるどのような対象を「見る」にせよ、網膜で同じ像が同じように示されることはありえない。知覚的有機体が同じ経験を二度することなどありえないことなのである。しかしながら我々は、サイズや色や形を何の困難もなく経験することができる。それはいかにしてか。それを解明する必要があるだろうとウェテリックは述べる (Wetherick 1999: 552)。

これを解明するにあたってウェテリックは、乳児が知覚を学習するメカニズムが手掛かりになるだろうと述べる。「生き延びるために、乳児は、世界のありようを学習しなければならない。それは、どんな種類の感覚入力を利用できるかにかかわらず学習しなければならないのである。」 (Wetherick 1999: 554) 人間有機体が、世界のありようを理解できるというこの最初の分析的ステップの存在を、ウェテリックは強く強調している。つまり、身体的な発達によって乳児は重力を経験する。乳児はハイハイをし、のちに歩き回るようになる。そしてそれぞれの発達段階において乳児は、外的世界との距離を知覚するのだという。

このときまでに、(シャロックとクルターが主張するように) 乳児らは、対象を言語的カテゴリーに同化させるようになるだろう。しかしその対象は、まず第1に対象として同定identifiedされなければならないのである。このプロセスは、知覚の心理学の主題問題である。(Wetherick 1999: 555)

これに対し、シャロックらは (Sharrock & Coulter 1999) で反論するわけだが、基本的には (Sharrock & Coulter 1998a) あるいは (Sharrock & Coulter 1998b) でおこなった批判を繰り返

返している。すなわち、(a)「日常的な言語」と「テクニカルな表現」との関係を精緻に考えるべきであること、そして (b) 概念的なものに対する問いと経験的な問いと取りちがえてはいけないということ、これである。

心理学と社会学のなかで現在扱われつつあるタームは、テクニカルな目的に端的に適用されるようになっていない（たとえば、物理学で端的に適用されているようにはなっていない）。心理学や社会学のなかでテクニカルに使用されている日常語は、ほとんど日常的な使用から乖離しておらず、そのまま利用しているだけなのだ。そして心理学者や社会学者は、

こうした日常的な語によって自分たちの「科学的」達成を可能にしているのである。日常的な語をテクニカルに使うことの必要性は、これらの語が日常的に使用されるその「仕方」あるいはその「用法」「文法」についての誤解に由来している。日常言語の「文法」に違反した使用は、ただ混乱を生み出すだけなのである。語の用法、すなわち概念をまずは精緻化すべきであるにも関わらず、日常語で立てた疑似問題を「科学的」または「経験的」に解明しようと試みるべきではない、とシャロックらは繰り返しさらに続けて、とりわけ辛らつに、ウェテリックが立てた経験的な問いに対し、シャロックらにとっては問いですらないと反論する (Sharrock & Coulter 1999: 560)。

先に筆者がブロック引用したウェテリックの記述に対し、シャロックらは、「ステップ」あるいは「第一に対象が対象として同定されるプロセス」をそうしたプロセスはありえない」と再び否定する (Sharrock & Coulter 1999: 560)。この点は繰り返しシャロックらによって述べられてきたことだが、彼らは「プロセスのような問題を仮定しながら「知覚する perceive」や「見る see」という動詞を説明することを求めるような理論はどんな理論であっても受け入れない」という (Sharrock & Coulter 1999: 560)。

次にシャロックらは、同じ引用部分に対し、こ

こでも語の用法が混乱していると指摘する。具体的には、ウェテリックが使う「対象 object」という語について批判している。すなわち、「対象」という語は、日常的な言語からすると「他の」用語なのである。そして、「対象」という語は、(英語を獲得する) 子どもたちによっては、「椅子」「テーブル」「テレビ」(これらの用語は、「対象 object」と呼ぶ用語の一つなのである) といった用語の前に学習される語ではないのだ。

それゆえに、ウェテリックがいう「対象の言語カテゴリーへの同化」という定式化については次のように述べる。つまり、人は何か something をテーブルやテレビとして特定する identify ことをまず学習し、そしてその後のみ「テーブル」や「テレビ」のような言語カテゴリーを学習するという考えは不適切であると述べる (Sharrock & Coulter 1999: 560-561)。シャロックらにとって、言語を学習することは、様々なものを学習することと内的に連関しており、活動や出来事の帰結 upshot であり、「プロセス」や「ステップ」のような活動では全くないのである。

6. 結語

その後、ウェテリックとシャロックらは (Wetherick 2000) および (Sharrock 2000) において再び議論を交わすが、そこでのやりとりはお互いにこれまでの主張を繰り返すだけだった。いずれにしても、シャロックらはウェテリックの批判および再批判を、「根本的な誤解」と評している。

本稿では、ギブソンについての論争をレビューすることで、エスノメソドロロジーと他の領域の論者の「見る see」ことについての考え方の差異を明らかにしようとした。紙数の都合上、強引に要約した箇所もあり、なかには取りこぼした論点もあるかもしれないが、できるだけ各論者の主張の要点を紹介することを目指した。

各論者の応酬は、互いに行き違っていたように思う。見ること seeing を考えるにあたって、シャ

ロックやクルトーのいう「概念」に、我々がどれだけ依存しているのかということは、コスタルらをはじめとする論者にはクリティカルに伝わったようには思えない。また、この論争に参加している論者のうち生態心理学のディシプリンに属するのはコスタルだけという点からして、この議論がギブソニアンの中なかでどのようにあつかわれる(べき)なのかも筆者には判断できない。しかしながら、まずは海外でこのような議論があったことを示しておくことは、今後の議論をするにあたって貢献することがあるかもしれないとも考えている。ともあれ、以上の論争を経ることで、今後の課題として筆者は、シャロックらが(あるいはギブソンもまた)が方向性を示しているように、実践の中なかで「見るsee」ことがどのように達成されているのか明らかにすることが重要だと考えている。

[参考文献]

- Costall, Alan & Ivan Leudar, 1998, "On How We Can Act," *Theory & Psychology*, 8(2): 165-171.
- Gibson, J.J., 1950, *The Perception of the Visual World*, MA: Houghton Mifflin. (=2011, 東山篤規・竹澤智美・村上嵩至訳『視覚ワールドの知覚』新曜社.)
- , 1966, *The senses considered as perceptual systems*, Boston, MA: Houghton Mifflin. (=2011, 佐々木正人・古山宜洋・三嶋博之訳『生態学的知覚システム』東京大学出版会.)
- , 1979, *The Ecological Approach to Visual Perception*, Boston, MA: Houghton Mifflin. (=1985, 古崎敬・古崎愛子・辻敬一郎・村瀬旻, 訳『生態学的視覚論——ヒトの知覚世界を探る』サイエンス社.)
- 前田泰樹, 2002, 「ヴィジュアル経験へのエスノメソドロジック的アプローチ」安川一編『視覚メディアにおけるジェンダー・ディスプレイのミクロ社会的分析』1999年度=2001年度科学研究費補助金研究成果報告書, 一橋大学, 33-51.
- 西阪仰, 1994, 「直接知覚・論理文法・身体の配置——見ることの相互行為的構成」『現代思想』22(13): 306-316.
- Noble, William, 1998, "On What We Say," *Theory & Psychology*, 8(2): 173-176.
- Reed, B. S., 1988, James J. Gibson and the psychology of perception, New Haven, CT: Yale University Press. (=2006, 古崎敬・古崎愛子・辻敬一郎・村瀬旻, 訳『伝記 ジェームズ・ギブソン——知覚理論の革命』勁草書房.)
- Ryle, Gilbert, 1949, 1963, *The Concept of Mind*. London: Hutchinson. (=1997, 坂本百大・井上治子・服部裕幸訳, 『心の概念』みすず書房.)
- 佐々木正人, 2015, 『新版 アフォーダンス』岩波書店.
- Sharrock, Wes & Jeff Coulter, 1998a, "On What We Can See," *Theory & Psychology*, 8(2): 147-164.
- , 1998b, "On J.J. Gibson: A Response to Our Commentators," *Theory & Psychology*, 8(2): 177-181.
- , 1999, "Elucidation vs Pseudo-explanation in Psychology: A Response to Professor Wetherick," *Theory & Psychology*, 9(4): 557-563.
- , 2000, "Blunderbuss and Scattershot: A Response to Professor Wetherick," *Theory & Psychology*, 10(5): 697-706.
- Suchman, L. A., 1987, *Plans and situated actions: The problem of human - machine communication*, Cambridge university Press. (=1999, 佐伯胖監訳, 上野直樹・水川喜文・鈴木栄幸訳『プランと状況的行為—人間—機械コミュニケーションの可能性』産業図書.)
- Wetherick, N.E., 1999, "On What Gibson (and the Rest of Us) Cannot Do Without: Comment on Sharrock and Coulter," *Theory & Psychology*, 9(4): 551-556.
- , 2000, "Explanation vs Pseudo-elucidation in Psychology: A Response to Professors Sharrock and Coulter," *Theory & Psychology*, 10(5): 689-696.
- Wittgenstein, Ludwig, 1980 [1953], *Philosophische Untersuchungen*, In *Werkausgabe* Bd. 1. Frankfurt am Main: Suhrkamp Verlag. (Translated by G. E. M. Anscombe, *Philosophical Investigations*. Oxford: Basil Blackwell.) (=1976, 藤本隆訳『哲学探究』ヴェイトゲンシュタイン全集8. 大修館書店.)

本稿は科学研究費プロジェクト「家庭医療におけるケア実践のマイクロ社会学」（課題番号 16H07260）のひとつとしてなされている。

【謝辞】

本稿を執筆するにあたって、松本麻里氏（立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科）に、資料の収集および整理等の作業にアルバイトとして従事して

頂いた。記して感謝を述べたい。

また、本稿を脱稿する直前に、国立情報学研究所にて開催されたLC研究会で発表させていただくという貴重な機会を得た。そこでいただいたコメントのなかにはエスノメソドロジーに批判的なものもあったが、筆者としては、今後の課題を多く頂戴したと感じている。LC研究会のみなさまにも記して感謝を述べる。